

自閉スペクトラム症の環境要因

松崎秀夫

福井大学/子どもこのころの発達研究センター

自閉スペクトラム症は、コミュニケーションの障害、社会的相互作用の障害、限局した興味と行動、知覚過敏や多動傾向を臨床的特徴とする神経発達症の1型である。近年の有病率の高まりが社会的にも注目されているが、その原因は未だ不明とされており、これまで先天的な遺伝要因と後天的な環境要因の双方向から発症要因が検討されてきた。Folstein & Rutter (1977)の双生児一致率研究の成果から、自閉スペクトラム症では80年代以降1000報以上の原因遺伝子探索が行われたにもかかわらず、自閉スペクトラム症のすべてに関与が認められるCommon Variantは見いだされていない。近年では遺伝と環境の相互作用の結果、エピジェネティック作用によって発達の途上にある脳内シナプスに異変が起きて発症するとの仮説が主流となった。したがって自閉スペクトラム症で環境要因の問題を考えると、重要なのは「いつ」「どこで」環境因子が中枢神経に影響を与え、発達の異変が始まるのかという点である。自閉スペクトラム症の診断基準では「症状は発達早期の段階で顕現化する」ことから、受精後より出生直後までの発達過程における環境要因が多く検証され、自閉スペクトラム症の異変の開始がおそらく妊娠初期であろうという見方は、多くの報告で一致している。この演題では、自閉スペクトラム症との関連が議論されてきた環境要因について、薬物・ウイルス感染・ワクチン・重金属・農薬等を中心に概説する。